

他力の三業を成就し色心ともに吾物にあらず、何ぞ心を心にまかすべけんやという。

仏の色心と衆生の色心と無二無別、彼此の三業相ひ捨離せず、即身弥陀の色心を成就す。

離三業の当体、彼此の三業相捨離せず、色心ともに我れにあらず三業の外の念仏はそのままに、名号の外に浄土なく来迎もないから、他力の信現成のところ仏祖現成のところとなり、仏の姿となる。これを当体仏果と往阿はいつている。念仏の姿そのままに当相正覚にして弥陀心中の我等であるといい、また唱うる当相即応声即現の来迎なれば、即坐道場の花開けたる故に人中上々妙好華というところある。わがわれならぬ境涯を pūṇḍarīka に喩えている。即坐道場の念仏の人を分陀利華とするのである。

往阿の『時宗綱要』に「自身に於て一毫の理証あるに非ず、自身に於て一毫の善行あるに非ず」「当体の一念一声は正覚往生今当に成就すべしと心得、工夫を仮らず心地を踏まず、専ら弥陀の帰命に一任し」といい只念仏する、これが時機相應の宗だといっている。「六十万人頌」にいう離念とは機の三業を離れたる所をさし、本願唱名の形貌なりといっている。要するに離三業の謂にはかならない。その行者は知らず識らず周遍法界の自性の妙理に証入するを一遍証というのである。すでにわれはわれに非ず位地諸仏に同じく希有の分

陀利華であるという。その白蓮華は心行具足して仏と人と機法一体であり、依正不二蓮華大藏海会にあるとする。

当体の一念とは「一声一念聞位の四種の往生あるを皆取つて一念往生と云ふ」という。続いて「若し夫れ一声一念にして往生するを得ざれば十声千声万声無量無辺の声念も焉んぞ往生すべけんや。況んや此の四種の機既に往生すと説く、然れば是れを以て証とす。往生は一念にありて抑も亦聞唱不二」なりと道破している。直ちに次に宗旨の根幹ともいふべき十一不二の論理に肉薄し懇説している。

彼の十劫正覚は此の一念往生に成就したれば、彼の正覚は此の往生、此の往生は彼の正覚にして、若し此の往生を離れたれば彼の正覚は成就すべからず、若し又彼の正覚を離れたれば此の往生は得べからざるなり。故に正覚往生は無二無別にして、衆生界即弥陀国弥陀国即ち衆生界、彼の十劫は此の一念此の一念は彼の十劫にして淨穢不二一不二の甚深の妙旨を頌したり。

と。正覚と往生が無二無別だから当相証無生となり、一声一念国界平等にして坐大会となる。国は弥陀国、界は衆生界、淨不淨を論ぜず、十劫の昔より人界九界の群類の坐すべきもの皆悉く成就し畢れりという。

次に綱要の第二節離成三業を見よう。「離成三業とは自力我執の人我の見解を離れ、離分別離所着の三業を成就するを云ふ」と。また「今や幸なる哉、機法党一体にして離分別離

所着なる本願他力難思の妙術あり、焉んぞ之に一任せざるを得んや」という。本願他力の妙術とは凡夫の形体のままに、人々の意樂のままに六字名号に没入することであり、その六字においてその三業が此彼転換して、国界平等坐大会となり、それが同時に妙好華であり、また清淨無為法身に直入する体験となるのである。宗祖は化他に約し離三業といい、二祖は已証に約して成三業といったものであり、いずれも勝劣はなく表裏にすぎない。

道俗時衆の初門において機功を抛棄せしむるために離三業と立つ。一切虚妄の境界は分別想念より発起す、有心は是れ生死無心は是れ涅槃なりとは宗祖の言である。有心は第一の怨人々を縛して焰羅所に到らしむ。浄土門は他力易行にして心念を離る、離三業はここでは無心にして自然智を領納するに等しい。故に『法事讃』に「末籍思量一念功」とある。今弘誓を仰いで果地の仏智に帰命し、六字の当相に仏とともに行じ仏とともにあり、このことが已に生死を離れていることであり、無心は是れ涅槃なりということの身触実証である。離三業が無心であり成三業が涅槃であるといえる。廓然大悟得無生忍というも同じく、またこの道を自然悟達の教門と名ずける。

二

当体一念と離成三業（河野）

次に夾山如海（一七四九）の『時宗要義集』を見よう。越前長崎称念寺で著したもの、その後山形光明寺を董している。玄秀に学を享けたことを本文中に告白している。玄秀は光明寺二十六世、如海は三十二世である。

まず安心なきをもつて安心とすることについて、機法不離一体之故約機不立安心。此故云無安心。爾如是逆惡人有何安心耶。

其名号者本願念仏也。依三本願念仏、滅逆惡機故。今日応化非三所説此故不依三釈迦教、依弥陀教。当流定無安心機也。

若爾無上功德名号既滅三逆惡十惡之道理。誹謗大乘之罪滅無耶。依当流無安心機者五惡十重誹謗闡提俱此納三機、無安心也矣。

要するに五逆十惡の惡人を正機とするというにあり、宗祖二祖以來の宗旨の肝要であるこというまでもない。無安心の安心であるから「更平生決定心此愚人曾無何具三心」。是三本願三心名号所具故。於機雖不請求自然具足三心「往生」とある。唯慈悲加祐の故に業火を去つて正念に住すというのである。三心は機が有つのではなく名号所具の三心と立てるのである。無安心の安心は自力の安心を否定することにおいて横豎ともに名号所具と断する。「三心四修五念皆南無阿弥陀仏也。依之名号入心名号心不レ可入。其所以名号信不信共称往生是他力不思議也」という。

所領解念仏三心所具故離機功一念仏。故他力中他力也。

当体一念と離成三業（河野）

三輩九品約能信故離機三業。独一名号落居時名号外無機法。三輩九品定散事理機法不二名号領解。自不_レ用_二機功_一。故離_二自力三業_一是為_二離三業落居_一。

弥陀正覺之時以_二名号_一決_二定衆生往生_上。不_レ論_二不淨_一不_レ簡_二心乱_一可_レ念_二仏_一。宗祖於_レ是明_二他力易行旨_一後領_二解三業外念_一勸_二衆生_一。是入_二時衆_一之初門。最初示_レ之立_二離三業_一名目也。

宗祖が離三業と立てるのは他力中の他力を顕すためであり、所詮時衆に入る初門自力心を離れて機功を捨てしめんためである。総じて心念を離るは仏教の掟であり、自力を離れて他力に依るは生死を離る謂であり、生死を離れるのは心念を離れるのを本となしている。聖浄二門自他二力異ると雖も心念を離る所以は同じ、決定の信は名号にあり、名号は他力の故に自力の機を離る。『散善義』に仏の捨てしめたまうを捨てよとは他力の意業に帰し他力の三業に帰することであり、宗家の釈にも契っている。これ一乗無価の称名相頼即是の妙術と喝破している。

『要義集』は上下二巻あり、第六離三業章は上の末に、第七成三業章は下の初にある。まず「離_二自力三業_一成_二他力三業_一故名_二成三業_一」と定義し、「定即離_二機功_一後一向非_二吾身心_一決定念_二仏_一時。仏三業衆生三業一致成所彼此三業不相捨離云_一」続いて「離三業也。然_レ而後非_二身心吾物_一我他彼此念慮其儘_一不_レ改念_二仏_一自成_二他力三業_一也。故離三業次_二名_一成

三業也」と。

『定善義』に衆生仏を憶念すれば仏亦衆生を憶念し給う、彼此の三業相捨離せず、故に親縁と名づく。これは自力の三業を離れて他力が現成する時仏と一体になることをいっただけであり、親とは親近、これを近縁という。自力の雑善を捨てて弥陀に親近結縁し奉ることが帰命であり、これ身命を譲り奉ることであってその後は仏の捨てしめ給うものを捨てる行者となる。機を信する自力雑行を捨てるのであり、このことが仏意に随順し仏願に随順することである。即ち離三業は廃捨の義であり、成三業は一行三昧称名の義である。他力の三業とは仏の三業であるから諸の邪業繋忽に脱し多劫の罪を除く、これを増上縁といい、離三業を成三業と見る時三縁具足するという。三縁は定善義に説く念仏の功である。また次のようにも説く、凡情を以って思量する法は誠あることなし、能縁の心は虚妄なる故に名号が真実であり不思議功德であり、真実とは弥陀の名であると。しかれば三心皆他力の真実心に外ならない。故に時衆に入るの当下能縁虚妄の三業をその儘仏智に帰命して、離三業が生仏一体となり、機法合成虚実不二にしてしかも真実の三業を成ずることになる、これを独一念仏というのである。

宗祖の頌の如く、六字の中もと生死なく、生死なき故に自他を謂わず自他を亡ずる時機功を離る。機功を離れば知恵を

離れ自力我執を同時に捨てているからこれを離三業といい、三業を離れた当体自己本分に帰っている。本分とは名号であり情慮なく無分別の法であり、無願三昧であり虚空無相にして尽十方無碍光如来と名ずける。このことは

宗意離機善惡二任所作天然奉讓威儀仏後愚鈍其儘境界令声打拳打拳称名号念念往生念念臨終俱会一处者念々見聖衆一時不断煩惱得涅槃分也。

三業を仏に任せまいらせた姿が凡夫身そのままに涅槃分である道破しているのであり、生仏一如の故に凡聖一体の合成が成三業であるから名号と往生と成仏が一となる。念仏の姿が仏であることをいう。能所の絶する位に生死を出ずることができるから弥陀大悲の大願業力に依って機法不二の名号と顕われ、念仏のままに成三業となるのである。このことは「任三業於天運讓四威儀於菩提」ということでもあり、また宗祖は「名号は自然無作法也」と表現している。

名号者機三業讓仏後自他三業不離。機法不二名号顯時。自己本分外無仏本分生仏一如故。南無阿彌陀仏者本分姿也。衆生仏同一法性故凡聖三業一体合成名成三業。

本分の姿だから往生即成仏であり、称名の外に往生あるべからずとなる。彼此の三業不相捨離だからである。これを他力実体の三業を成ずるといのである。身命を譲り奉って後は仏の捨てしめ給うをば捨て行ぜしめ給うをば行ずる。能帰の

当体一念と離成三業（河野）

機もなければ所帰の法もない、自力他力を絶して能所不二、機法一体の名号という。名体不二にして離三業の当体到他力を成ずるを一念発心といい、六字名号に即得往生住不退転があるという。

三

如海が宗乗を仰いだ玄秀の『統要篇』を披く。「総此宗習機持法自力也。機之所持持法云他力。機法一本本願念仏法也云名目。古來相伝也」。これは宗祖の言である。第十八願正因を強縁として念仏の当体、直ちに弥陀の真報土に生じ、これ証得涅槃の大覚位であるといっている。大願力を増上縁としそこにおいて正覚と往生は同時に成就され、その安心を十一不二という。当坐道場はまた当体蓮華であり、念々の名号に即得往生不退転となり穢土にありながら正定聚の人となる。念仏即是涅槃門となる。

安心決定とは無安心の称名に落著することであり、名号の外に機法なく機の領解に留らず念々に称名する。これが離三業の独立念仏であり、独一念仏ともいう。何等の与件も下心もなく安心起行ともに六字の中にあり、念々の声中に心行相応する。観念を嗜まず散善を求めず称名を生と憑む、能領解の三心でなく所領解の三心でなければならぬ。弘願のままに仏の三業相応して離三業が同時に成三業となる。「以離三

当体一念と離成三業（河野）

業称名^①当流^②為^③「枢要^④」と玄秀は断じている。これを時宗、三業離合相応之義という。

機が行を持つ能領解ではなく機が行に有たれる所領解の法において定散の善惡を離れて他力の信心を得るこれが三業相応ともいわれ、離三業そのものでもある。三心は即施即廢して独一念仏となる。能領解を廢して所領解につくのが即施であり、機に真実なしと知って如来の真実心に帰す、願力の真実の故に光明中に摂せられて仏の三業に成ぜられることとなる。ここに成仏三業とある。これが慈悲加祐令心不乱の謂れであるといっている。念仏の行者は仏と衆生と機法一体、彼此三業相応して仏願力より發起する大信心であり、「正覚往生十一不二故從^⑤二仏正覺^⑥開出^⑦衆生往生心運故^⑧。信願生^⑨念仏成仏自然也^⑩矣」と道破している。本願のゆく所、念仏のある所こそ自然法爾の境であり、森羅万象即弥陀となる。この風光を『器朴論』を引いて懇説している。

名号之外無^⑪三心三心之外無^⑫菩提心^⑬。信^⑭ニ凡夫所作善者皆難^⑮會^⑯不^⑰用^⑱自力^⑲。募^⑳ニ功於弥陀三業^㉑稱^㉒離三業名号^㉓。此時三心相^㉔契^㉕弥陀願力真心^㉖。所歸^㉗体者弥陀成正覺也^㉘。能歸^㉙信者名^㉚名号具德^㉛三心^㉜也。能所一体心行不離^㉝云^㉞是菩提心^㉟。

これは是当流の正義であると断っている。

当流安心有三重。一、初一念起信。二、離三業。三、一念発心。

1 定本下三四九頁下四行

2 定本下三四九頁上四行

37	35	33	31	29	27	25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	定本下三五二頁下經三行
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
七四	七〇	六五	五〇	同	一五二	一五一	一四八	一四六	一四二	一四〇	一三九	同	三二九	三五五	同	三五五	上六	
下一一	上終四	下五	下六	下終一	上七	下七	上一〇	下八	同一二	同一八	下一一	次もこれに続く	下五	下終六	下九	上六		
36	34	32	30	28	26	24	22	20	18	16	14	12	10	8	6	4	定本下三五三頁下一〇行	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
七一	七〇	六二	五一	同	一五二	一四九	一四七	一四六	一四一	一三九	三三五	三三三	三五八	同	三五五	同一二		
下終二	上一一	上一八	上一三	下一六	上三	同一二	上一五	上一七	同一二	下終一	上八	上一四	上八	同一四	同一二			
(未完)						次もこれに続く												

（島根大学名誉教授）

（未完）